

# カルチャー・ショック

## 外国人のみた日本



Nikolay Trifonov Naydenov  
出身地：ブルガリア・ロベッチ  
所属：ブルガリア科学アカデミー経済研究所研究員  
日本滞在：2004年10月～2005年3月

## 日本のイメージと現実

私が抱いていた日本のイメージは、印刷物や映像、そして日本語教師から得たものだ。そのため、高度に発達した技術社会（肯定的な意味で）伝統的な東洋哲学の価値観、切腹を含め、手段を選ばず名誉を守ることで誇りを持った人々が存在する社会を、私は期待したのであった。来日前には、日本人のプライドを傷つけないよう、父親から戒められたことはいまでもない。さもないければ「斬り殺される」かもしれないから。

技術面での日本の業績に対し、一九八〇年代後半から九〇年代前半まで、次のようなジョークがブルガリアで流行した。「日本とブルガリアだけは、なぜエイズの影響をあまり受けていないのか。」エイズは二〇世紀の疫病であるが、両国とも二〇世紀がなかったのではないか。つまり、日本は二一世紀にあり、ブルガリアは一九世紀に戻っているのだ。このようなジョークはブルガリア人的な気質を表しているが、それはまた、日本がかなり高度な経済成長の段階にあるとするイメージをも示している。要するに来日前の私には、全く異なった思考や生活様式をもつ人々に出会えるのではないか、という期待があった。

だが良くも悪くも、そのような期待は裏

切られた。現実には一九八〇年代のブルガリアは、一九世紀当時のそれではない。コンピュータ、テレビをはじめ、ハイウェー、原子力発電所等が一九世紀に存在するはずもない。これらは、その当時には想像さえできなかった（一九世紀の人々が今より不幸だったと言いたいのではなく、一九八〇年代のブルガリアは明らかに一九世紀のそれではないということである。念のため）。

実際の日本人は多くの点でブルガリア人と似通っていたが、それでも驚いたことはある。日本に住み始めた最初の日、通りで大きな叫び声が聞こえた。私は好奇心が強いので、人生で初めてサムライの決闘を見られるかもしれないと期待して、（学生寮のようにみえる）自宅の窓から外を見た。だが、サムライはおろか喧嘩する人さえ見あたらなかった。その叫び声は、ガソリンスタンドの従業員が、車で乗り入れる顧客を迎えたり、見送ったりしている声であったのだ。

私の国と比較すると、日本でサービス業に従事する人々の礼儀正しさと熱心さは、ショックに値するものであった。だがその驚きは、時が経つにつれて感心へと変わった。日本人はなんともうまく物事を素

速く片づけられるのだろう、とまで思えるようになったのだ。

数日後、私は地方のある小さい町に行った。その際、私はそこに住む子どもたちの注目の的となってしまった。校庭のそばを通り過ぎようとしたときに、子どもたちが私を指差して、「ガイジン！ガイジン！」と叫んだのであった。悪ふざけではなく、単に日本人の中ではすぐ目につきやすい私に興味があったようだ。多くの子どもたちにとつて、私はおそらく初めて出会ったヨーロッパ人であったのだろう。このようなことは、ブルガリアの小さな町でも起こりえたことであつたと思うが。

私がその後、更にショックを受けたことは、日本人のなかには「日本人」と「ガイジン」は同じ人間であることを認めながらも、「日本人」と「ガイジン」との枠でしか物事を考えられない人々がいたことだ。しかし、もちろん人を評価する際に、国籍などではなく、個人として評価してくれる人も、最近では増えてきているのも確かである。

最後に、日本滞在中に私が得られた素晴らしい思い出に対して、親切で開放的な日本の皆さんに感謝したい。

（前海外客員研究員／訳＝梶山貴史）